

研究報告

女性にとってのライフプランの背景にあるものとその意味の探求 ～B地域の子育て学習・支援センターに来所された 分娩経験女性を対象に～

Investigating the Background and Meaning in Women's Life Plans
“Women who Visited the Parent Learning and Support Center in Region B”

池尻都¹⁾, 川崎佳代子²⁾, 曾我部美恵子²⁾, 小嶋理恵子³⁾

1) 公益財団法人 田附興風会 医学研究所 北野病院

2) 関西看護医療大学 看護学部 母性・助産学領域

3) 愛媛県立医療技術大学 助産学専攻科

Miyako Ikejiri¹⁾, Kayoko Kawasaki²⁾, Mieko Sokabe²⁾, Rieko Kojima³⁾

1) Tazuke Kofukai Foundation, Medical Research Institute, Kitano Hospital

2) Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Nursing, Maternity Nursing and Midwifery

3) Ehime Prefectural University of Health Science, Midwifery Graduate School

要旨：

研究目的：女性にとってのライフプランの背景にあるものと意味を明らかにする。方法：研究デザイン：質的な因子探索型研究、対象：B地域子育て学習・支援センターに来所された、末子が1歳頃までの時期にある女性10名、倫理的配慮：倫理審査委員会の承認を得てその基準に従って実施。結果・考察：対象の平均年齢は29.9歳（24～41）であった。結婚前について対象者が語った内容からはライフプランに影響している要因を表していると思われる4つのライフプランの背景にあるものと意味を表すテーマが、結婚・妊娠・出産を経験してみた後では7つのライフプランの背景にあるものと意味を表すテーマが分析され、結婚前は、性別役割分業意識から抜け出せないまま、また周囲からもそういうプレッシャーを受けながら、社会全体に浸透している「個人化」の価値観とのせめぎあいの中で苦悩している姿が浮き彫りになった。結婚後は、予想外であったり、思い通りにならない経験を積みながら、自分の選んだ人生を肯定的に受け止め、折り合いをつけ、新たな発見をしながら成長していた。結論：今後のライフプランニング教育に活かしていくべき課題が明確になり、今の社会であるからこそ求められる助産について考える大きな示唆も得られた。

キーワード：結婚出産経験女性 ライフプラン 背景 意味

Keywords：Married, Post-natal women, Life plans, Background, Meaning

I. 序論

正岡(1994)は、戦中及び戦後においては、ある特定年齢(男性28歳、女性24歳)で結婚することを要求する社会規範があったと述べている。即ち成人すれば結婚するのは当たり前の社会であった。しかし、平均初婚年齢は現在(2013年)、夫30.9歳、妻29.3歳と上昇傾向が続いている。また、女性が一生の間に産む子ども数を表す合計特殊出生率も、2013(平成25)年は、1.43と近年微増傾向ではあるものの低い水準にとどまっている(内閣府,2015)。その背景として阿藤(1997)は、1970年代半ばから顕著になった女性の高学歴化、雇用労働率の上昇、賃金水準の上昇という女性の社会経済的地位の実態面での変化を上げ、その変化を後追いつする形で、1980年代にそれにかかわる価値観の変化が急激に起きたと述べている。その価値観の変化を表す一つとして、柏木(2001)は、子どもを産む意味が、現代の夫婦にとっては、心理的な満足でありきわめて個人的な事柄として扱われるようになり、仕事を続けるも続けないも、結婚するもしないも、子どもを持つも持たないも、女性の生き方の必然ではなくなり、その選択には光と影が伴うようになったと述べている。

社会的にも、国際法および国連での合意に基づいた女性の人権の一つとして、Reproductive・Health/Rights(性と生殖に関する健康・権利)という概念が、1995年に北京で開催された第4回世界女性会議(北京会議)で採択され日本も批准して現在に至っている。つまり「産む・産まないは女性の自己決定」という、性と生殖に関する健康については、当事者である女性自らが自己決定する権利であることを世界に発信した。一方、柏木(1999a)は、子どもの存在がもたらす価値を母親は世代を超えて高く認め、産みたい動機は決して低くないと述べ、国立社会保障・人口問題研究所が実施した「第14回出産動向基本調査結婚と出産に関する全国調査」(2011年)でも、「理想の子ども数」に比べて夫婦の実際に持つ子どもの数は少なく、子どもを持ちたいが何らかの理由でもてない状況にあることを示した。また、体外受精による出生児数は、2004(平成16)年18,168人から2010(平成22)年28,945人と、全出生児数に占める割合は、1.64~2.7%に増加

した。不妊治療の背景には、晩産化の進行があり、母親が35歳以上の出産の割合は、平成11年11.9%平成23年24.7%、母親が40歳以上の出産の割合も、平成11年1.3%、平成23年3.6%と上昇している(厚労省,2014)。2012年6月に放送されたNHKスペシャル「産みたいのに産めない~卵子老化の衝撃~」は急増する不妊の背景に「卵子の老化」があり、そこには女性の社会進出が進む一方で妊娠・出産を考慮してこなかった社会の姿がある、と結論付け、不妊に悩む多くの女性が、治療を始めるまで卵子が老化する事実を知らないでいたことを指摘している(NHK取材班)。山崎(2009)も、妊娠可能な年齢にある女性たちは妊孕力の低下年齢について認識しておらず、35~40歳頃まで妊娠ができると認識している傾向がみられたと報告している。

本研究は、そういう社会背景の中で、現在、出産や育児を経験中の女性が、どういう経緯で現在に至り、どういう内面的な心理過程を経験しているのか、ライフプランの背景にあるものとその意味を把握することによって、女性が、結婚・妊娠・出産・育児という女性にとって重要なライフイベントを、後悔しないで、希望を叶えながら実現していけるように、専門職としてどうアプローチすべきかの基礎資料を得たいと考えたものである。

II. 目的

女性にとってのライフプランの背景にあるものと意味を明らかにする。

III. 方法

1. 研究デザイン：質的研究(半構成的面接)

文化を背景にしている、結婚・妊娠・出産・育児の現実的経験のプロセスや、内面的プロセスは、量的研究では正確にとらえにくく、内側から観察し、詳細に記述することが必要である。従って本研究は、質的な因子探索型研究である。

2. 研究対象

B地域在住で結婚・出産経験を経て、末子出産から1歳頃までの時期にある女性で、子育て学習・支援センターに来所され、研究への承諾の得られ

た方 10 名。

3. データ収集に至る過程

研究開始前の手続きとして、子育て学習・支援センターの担当者に研究計画書を用いて直接説明し同意を得た後、市長に依頼文を送付した。研究協力者に対しては、子育て学習・支援センター来所時に、集団対象に 10 分程度の説明の時間をいただき、研究の概略、倫理的配慮を説明し、協力してくださる方を募集し、応募していただいた方に、文書ならびに口頭で、調査の目的・意義、方法、調査時に守るべきことを倫理基準に従って説明した。承諾が得られたら、対象者の予定に合わせて、調査実施日の日時と場所を確認し依頼した。

4. 研究協力者に対する倫理的配慮

面接はプライバシーが保護できるよう子育て・学習センター内に個室を準備し、子どもの安全を確保し、母親が面接に集中できるよう母親の目の届く範囲内に託児場所を設置し共同研究者が危険が無いように付き添った。面接日当日、改めて研究概要や倫理的配慮について説明し、書面による同意を得た。面接は半構成面接とし、面接内容については、ICレコーダーに録音させていただき、分析対象にすることを対象者に説明し了解を得て実施した。その他の倫理的配慮に関する詳細は、関西看護医療大学倫理審査委員会で承認された倫理基準に従って実施した。

5. 研究期間：平成 26 年 7 月 30 日～9 月 30 日

6. 分析方法

表 1 領域分析ワークシート

面接内容は逐語録を作成し、分析は Spradley の「The ethnographic Interview」Making a Domain Analysis の手法を用いてデータ分析を

行った。Ethnography は質的に文化を記述する研究方法であり、そこに住んでいる人のものの見方や生活との関係を理解し、その人の世界についてその人に見えるものを実現化することである (Spradley, 1979) としており、本研究の目的は、妊娠・出産に関して日本や地域の文化と深い関連があることから、本研究の目的と合致するものであると考えた。しかも初学者でも取り組めるように、領域分析を行うステップが明示されていて (Spradley, J.P., 2010) 大学院生でも手堅く分析が行えると考えた。データ分析は、妥当性を高めるために、母性看護・助産学分野の研究者にスーパービジョンを受けた。

7. 用語の定義

分娩経験女性：分娩を経験した女性、妊娠・出産回数及び分娩の正常・異常は問わない。

ライフプラン：社会や文化と切り離すことができない「個人の主観的・現実的経験を通しての結婚や出産に関する自己の計画や思い」であって「人生設計」という広義で多面的な意味ではない。

タイトルにある「意味」：「背景にあるもの」に含まれる特定で具体的な事象や概念を説明する内容

IV. 結果

1. 対象者の概要

表 2 対象者の属性

対象者	年齢	結婚年齢	対象者	年齢	結婚年齢
A	24 歳	20 歳	F	26 歳	20 歳
B	26 歳	22 歳	G	26 歳	25 歳
C	37 歳	33 歳	H	34 歳	27 歳
D	29 歳	26 歳	I	26 歳	19 歳
E	30 歳	27 歳	J	41 歳	37 歳

年齢は、最少年齢 24 歳、最大年齢 41 歳、平均年齢 29.9 歳である。結婚年齢は、19 歳～37 歳、平均初婚年齢 25.6 歳であり、2013 年における全国平均初婚年齢（夫、30.9 歳、妻、29.3 歳）に比較して若い傾向を示した（内閣府、2015）。この 10 名の中で 3 名が妊娠先行型結婚であり、現在 4

人に1人が妊娠先行型結婚という報告（厚生労働省，2009）があることから，全国的な平均に近いと考えられる。

2. 対象者が表現したライフプランの背景にあるものとその意味

対象者が語った内容を分析した結果，ライフプランの背景にあるものとその意味は，時系列で，結婚前について語られた内容と結婚・妊娠・出産・育児を経験してからの内容に分けられたので，この大きな分類の中で説明する。

1) 結婚前のライフプランの背景と意味に関する内容

表3 結婚前のライフプランの背景と意味

テーマ	サブテーマ
女性の個人的考えや事情	伝統的な結婚観・出産観へのとらわれ
	子どもは欲しい
	パートナーが主導する結婚や妊娠・出産
	女性の社会進出に対する意識
	自己の妊孕力の認識
	決断せざるを得なかった予想外の妊娠
	家族の理解とサポート
	二者択一性のある仕事と結婚
B地域の背景や文化	結婚や妊娠についてあいさつ代わりに周囲の人に言われる
	跡取りという考えが残っている
	結婚や出産年齢が若いB地域の特性
生い立ちや環境	出生家族から受けた影響
	友人や周囲からのプレッシャーや意見
不確かな情報に惑わされている	限られた情報入手先
女性たち	曖昧な情報内容

結婚前について対象者が語った内容を分析した結果，【女性の個人的考えや事情：表3に示す8つのサブテーマで構成】【地域の背景や文化：表3に示す3つのサブテーマで構成】【生い立ちや環境：表3に示す2つのサブテーマで構成】【不確かな情報に惑わされている女性たち：表3に示す2つのサブテーマで構成】という4つのライフプランの背景にあるものと意味を表すテーマが分析された。4つのテーマごとに，それぞれのサブテーマを，対象者の語りを，Data：「太字」として示しながら説明する。原稿枚数の関係で，各テ

マをどう解釈してサブテーマにしたかの説明を省略し，提示するData数は1～2事例に限定した。

【テーマ1：女性の個人的考えや事情】

「サブテーマ① 伝統的な結婚観・出産観へのとらわれ」

Data：「女性にとって結婚や出産ってするものって概念が強いじゃないですか。っていうのが大きかったんですけど」

「結婚の前にどっちかって言うたらその…，個人的に遊びたいとか，旅行行ったりとか，好きに自由にしておきたいからっていう部分が多かったですね。結婚してからは，妊娠の前に遊び倒したっていうか，悔いがないようになって感じで…」

「サブテーマ② 子どもは欲しい」

Data：「すごい子ども好き派ではないんですけど，やっぱり子どもは欲しいってのはありましたね」

「サブテーマ③ パートナーが主導する結婚や妊娠・出産」

Data：「（結婚を決めたきっかけは）やっぱり，一緒になってほしいって言われたのですかね」「旦那の方の職業がつかなかったもので，それを待って27になったって感じですかね」

「サブテーマ④ 女性の社会進出に対する意識」

Data：「女性も社会進出するようになって，女の人は家事をして子どもを産んでっていう時代じゃないんですね。友達でもやっぱり専業主婦っていう人はあまりいなくて」

「サブテーマ⑤ 自己の妊孕力の認識」

Data：「もともと生理不順でできにくいんちゃうかなっていう気持ちがあったので，できるだけこういうことに関しては不妊治療ではなく自然な形を取りたかったので旦那と話をしたことがありましたね」

「サブテーマ⑥ 決断せざるを得なかった予想外の妊娠」

Data：「第1子の時は正直20歳のときで，自分が学生やって，その時に出会った人との間で，まあ子どもが先にできちゃって…今で言うできちゃった婚やけど…まあ子どもができたからというか…何て言うんやろ…」

「サブテーマ⑦ 家族の理解とサポート」

Data：「子どもができて結婚ってなって，お互

い学生やし、子育てできるような経済的にも余裕もなかったし、主人も当時まだ働いてへんし、親には迷惑をかけるだろうなってわかってたけど、どっちの親も了承してくれたから今があるんかなって」

「サブテーマ⑧ 二者択一性のある仕事と結婚」

Data:「付き合って3年目に結婚してって言われたんですけど、私がまだ仕事でどたばたしている時で、折角言ってもらってるんで、その言葉に甘えるために2年待ってって言って、2年の間に仕事に全部けりをつけてそれで結婚したのが25歳の時」「仕事に対して熱い気持ちがあったので、結婚しないでもう仕事だけで生きていきたいなあって気持ちがありましたね」

【テーマ2：B地域の背景や文化】

「サブテーマ① 結婚や妊娠について挨拶代わりに周囲の人に言われる」

Data:「やっぱり田舎だと結婚して1年子どもがないと聞かれますからね。挨拶代りに。結婚も出産もまわりが言うてくることが多いのかなって」
「サブテーマ② 跡取りという考えが残っている」

Data:「相手も長男だったんで、私も女姉妹で跡取りいなくて、姉が後取らない感じだったんで、私が跡取ろうかなってずっと思ってたんですけど、相手が長男やったんで、こう…嫁に行きたくないけど、まあ相手が長男やから仕方なくみたいな感じで。その辺がちょっと大変だかっていうのはありますね」

「サブテーマ③ 結婚や出産年齢が若いというB地域の特性」

Data:「B市の人って結婚とか早い人が多いじゃないですか…それもあって」「特にこのB市に来て、出産率の高いこと。向こうにいた時は働いていてもそんなに出産する周りの人いなかったんですけど、ここにきてから、出産する人を何人も何人も働きながら見送る辛さが…人の出産を喜べない辛さが、ほんとに辛かったの。」

【テーマ3：生き立ちや環境】

「サブテーマ① 出生家族から受けた影響」

Data:「ライフプランは…まあ3人…、自分も旦那も兄弟がいて一人っ子っていうのがちょっと

かわいそうやなって思ってたし、気持ちはわからへんから、やっぱり兄弟っておった方がええかなって」「あの一まあ、見本じゃないんですけど、私の母がだいたい22～23で子供を産んでたので1つ目安ですね」

「サブテーマ② 友人や周囲からのプレッシャーや意見」

Data:「周りも結婚し始めたし、やっぱり周りにも言われたりもして」「周りに結婚している友達とかもいてたので…10代で結婚してる友達も結構いてたので、早く結婚するのも素敵やなと思ってた」

【テーマ4：不確かな情報に惑わされている女性たち】

「サブテーマ① 限られた情報入手先」

Data:「ほとんど自分でしたね、ネットとか本とかで調べたりしましたね」「インターネットとか雑誌で」

「サブテーマ② 曖昧な情報内容」

Data:「やっぱり「妊すぐ」とかすぐ買って、妊娠初期に摂った方がいい栄養素とか、そういうのとか、基本的な情報は集めましたけど」「高校のときは家庭科で出産とか幼児教育みたいな勉強がありました。その先生が妊娠していた時の話とか授業でしてくれたのとか覚えてます」

2) 結婚・妊娠・出産を経験してみた後のライフプランの背景とその意味に関わる内容

結婚・妊娠・出産を経験してみた結果をもとに対象者が語った内容を分析した結果、【未知の体験としての結婚・妊娠・出産は、予想通りにはいかない体験：表4に示す7つのサブテーマ】【結婚生活の現実は甘くない：表4に示す3つのサブテーマ】【家庭生活と仕事の両立への葛藤：表4に示す4つのサブテーマ】【育児の重みと子どもへの思い：表4に示す6つのサブテーマ】【自分が選んだ人生に折り合いをつける：表4に示す3つのサブテーマ】【新たな発見：表4に示す4つのサブテーマ】【結婚・妊娠・出産を経験したことでのライフプランへの認識：表4に示す4つのサブテーマ】の7つのライフプランの背景にあるものと意味を表すテーマが分析された。

表4 結婚・妊娠・出産を経験してみた後のライフプランの背景と意味

テーマ	サブテーマ
未知の体験としての結婚・妊娠・出産は、予想通りにはいかない体験	結婚・出産の時期はタイミングである
	新しい環境での結婚生活への不安
	結婚は思ったものと違ったが、出産は想像通り
	お腹が大きくなることで実感した母性
	経験を通して実感した妊娠期のしんどさ
結婚生活の現実が甘くない	授かってくれたという思い
	産める性のはずと思っていた自分
	自由に使えるお金も少なく、育児にもお金がかかる結婚生活
家庭生活と仕事との両立への葛藤	自分個人の生活が制限される結婚生活
	相手の悪いところも隠せず見えてくる結婚生活
	育児休暇による不利益
育児の重みと子どもへの思い	仕事復帰したくてもできない現状
	思い通りにいかない育児
	仕事よりも結婚を選んだことによる割り切れない思い
	心配事や不安、難しさの中でも感じる育児の楽しさ
	仕事をしたくても育児に重みを置かざるを得ない現状への不満と諦め
自分が選んだ人生に折り合いをつける	ライフプランを変更してでも納得がいくまでしたい家庭保育
	女性の中で変化した子どもの存在
	結婚は途中でやめられるが、育児は一生
新たな発見	女性の育児を支える友人や子育て広場
	自分の時間が作れないが、それは結婚の宿命であるという受け止め
	自分の人生の選択に後悔はしていないという認識
結婚・妊娠・出産を経験したことでのライフプランへの認識	100%の満足ではないが、良かったと思っている結婚
	出産によって強くなった自分
	出産によって改善した夫婦関係
結婚・妊娠・出産を経験したことでのライフプランへの認識	出産によって考えたようになった子どもの成長や親の老後、自分たちの老後
	出産によって実感した夫や親のサポートの重要性
	ライフプランの重要性
結婚・妊娠・出産を経験したことでのライフプランへの認識	ライフプランを持つことによって焦りやプレッシャーも起こる
	ライフプランは修正しながら新しいライフプランを持つ
	ライフプランには正しい知識も必要である

【テーマ1：未知の体験としての結婚・妊娠・出産は、予想通りにはいかない体験】

「サブテーマ① 結婚・出産の時期はタイミングである」

Data:「周りも結婚してるってのもあったし、やっぱりタイミングって言うんですかね。ほんまちょっと前だったら本当に結婚する気は全然なかったんで。丁度タイミングがあったみたいな感じで」

「サブテーマ② 新しい環境での結婚生活への不安」

Data:「慣れてない土地に行くので、その土地に慣れるのかもですし、旦那の親とも仲良くやっていけるかどうかっていうのもあったし」「結婚は知らない土地に来るので不安はあったし、子どもも育てれるかって」

「サブテーマ③ 結婚は思ったものと違ったが、出産は想像通り」

Data:「結婚は思ったのと違ったけど、出産は…って感じですね」「私が理想に思ってた結婚生活っていうのはまあ、旦那は働きに行って私は家の事をするんですけど、たまには家を手伝ってくれたらいいなあと思ってたんですけど、実際は疲れてるし、帰りも遅いんで」

「サブテーマ④ お腹が大きくなることで実感した母性」

Data:「若いときはまだええやとか、思ってたけど、やっぱりできて、自分のお腹に子どもがおるってなったらやっぱり…ちょっと気持ちが変わった」「お腹が大きくなってくると、だんだん楽しみっていうのができてきて」

「サブテーマ⑤ 経験を通して実感した妊娠期のしんどさ」

Data:「出産ってその…産むときの怖さしか聞いてなかったんで、10か月間のつわりのしんどさとか…全然知らなかったんで…こう…産むだけじゃなくてそれまでがしんどいなあっていうのがあって」

「サブテーマ⑥ 授かってくれたという思い」

Data:「不妊治療っていうのは最近多いので、やっぱり、こうやってできてくれるのってホントに幸せな事やなって」「まあ授かってくれたなってみたいには思ってます」

「サブテーマ⑦ 産める性のはずと思っていた自分」

Data:「全然できなかつたんですよ。2年経ったら不妊って言う定義が張られるので、2年でできひんかったら治療考えなあかんかなって思ってたんですけど。まあ3年まで頑張ったんですけど、やっぱりできなくて、何か原因があるのかもしれないねってということで3年目から治療に通い始めたんですよ」

【テーマ2：結婚生活の現実が甘くない】

「サブテーマ① 自分が自由に使えるお金も不自由で育児にもお金がかかる結婚生活」

Data:「現実問題やっぱり、私は学生で、就職せずに結婚して大変だったと思うのは経済だったんですね。結婚して妊娠中、今もそうなんですけど、仕事してないと自分の自由なお金がないから、旦那の収入でちょっと遊びとか友達とランチに行くとか、自分の貯金があれば良かったってなあってはすごく思います」「結婚して考えるようになったことは、あの一お金もいるなあって。」

「サブテーマ② 自分個人の生活が制限される。結婚生活」

Data:「結婚前は自分の生活もあるけど、結婚したらね、自分の時間はあるけど限られてるし、

子どもの方に取りられてしまうし」

「サブテーマ③ 相手の悪いところも隠せず見えてくる結婚生活」

Data:「結婚は、付き合っている時と比べたら、相手のいいところ悪いところがよくわかるようになるというか、隠していたところも隠せなくなって悪いところも見えてくる」

【テーマ3:家庭生活と仕事の両立との間での葛藤】

「サブテーマ① 育児休暇による不利益」

Data:「家を建てようかなと思っても、妊娠出産によってお給料とかも変わってくるし、旦那が自営業でローンが借りれないので、私が借りるってなった時に育児休暇中は借りれないんですね。年取とかが低くて審査が通りにくいので」

「サブテーマ② 仕事復帰をしたくてもできない現状」

Data:「病院関係みたいな、会社に併設しているって言うか、そんなんやったら復帰しやすい環境なんやろなどは思います。いま保育所預けることとか経済的なことを考えたらやっぱり無理で…」「どのタイミングで(仕事)復帰しようかなっていう…あとは保育所のことですかね、そんないろいろ…(仕事)復帰するのに復帰したらしたで、またあの会社の方が人の配置であったりとかで面倒なことになるんやったら、続けて休んだ方が会社にも自分の負担にもならへんのかなって思ったり」

「サブテーマ③ 仕事よりも結婚を選んだことによる割り切れない思い」

Data:「いままでの人生を振り返ってみて、やっぱり、仕事のことが一番ですかね、仕事してた方が良かったかなあとか、あの時子どもが出来てなかったらどうなってたかなあとか、仕事している自分を想像したりはすごい考えます」

「サブテーマ④ 仕事をしたくても育児に重みを置かざるを得ない現状に未練と諦め」

Data:「やっぱりお母さんがおれへんというのが子どもにとっては不安感を与えるんじゃないかというのがすごくあるので、そこはやっぱり自分が働きたいという気持ちは制限していかなければならないんだなと。本当は仕事のフルで復帰して、前のように働きたいんですけど。でもこうやっ

て年取ってフルで復帰するなんて到底…。自分が充分に働けないってのはつらいですね」

【テーマ4:育児の重みとこどもへの思い】

「サブテーマ① 思い通りにいかない育児」

Data:「何もかも思い通りにならない。自分のこう…1日スケジュールしようとしていることが全くできないことが苦痛で、今までこう…自分でこうしようと思ってできとったことが、もう本当に…夜ご飯一つ作るのが朝9時から始めてやっとな夕方の6時にできあがるような…状態が続いて。掃除も何もかも追いつかないところが…こんなにも自由がきかへんのかっていうのが」

「サブテーマ② 心配事や不安、難しさの中でも感じる育児の楽しさ」

Data:「育児は難しいし大変っていうのはあるんですけど、楽しいっていうことが一番ですかね」「生まれて2か月はそれこそ無理って思ってたんですけど、やっぱり、日々成長するのを見ていて、だんだん楽しくなってきた。」

「サブテーマ③ ライフプランを変更しても納得がいくまでしたい家庭保育」

Data:「仕事してるときは1年の育休でと思ってたんですけど、自分の心の中では産む前から…。やっぱり産んだら自分でみときたいなっていうのがあって」

「サブテーマ④ 女性の中で変化した子どもの存在」

Data:「出産したら、自分よりも娘が中心になるので自分の事は後回しでも子どもの事子どもの事ってなる」「やっぱりそれなりに自分の時間も作ってたんで。でも、もう今からは子どものために時間はあげようっていう考えになりましたね。」

「サブテーマ⑤ 結婚は途中でやめられるが、育児は一生」

Data:「結婚はね、別に…途中でやめることとかできるけど、子育ては一生心配して生きていかなあかんので」

「サブテーマ⑥ 女性の育児を支える友人や子育て広場」

Data:「こっちに友達はいってます。その人たちがたまに遊びに来てくれて、ストレス発散にはなってますね。いまはこの子育て広場が本当に支えになっていますね」

【テーマ5:自分が選んだ人生に折り合いをつける】

「サブテーマ① 自分の時間が作れないが、それは結婚の宿命であるという受け止め」

Data:「やっぱり、自分の時間が作れないのがちょっとしんどいなって思う時もあるけど、仕方ないというか…まあそれが結婚した性なのかなっていうか…」

「サブテーマ② 自分の人生の選択に後悔はしていないという認識」

Data:「でも、まあ20歳で子供が出来て…、まあその時の考えは甘かったけど、自分らも、相手も考えが軽かったかもしれないけど、振り返ったら、周りの子も結婚して、やっぱり早く子どもできて早く母親になれたってことは自分にとったら、プラスというか、このままずっと子どもおらんと独身やったら今の自分はなかったし…」

「サブテーマ③ 100%の満足ではないが、良かったと思っている結婚」

Data:「理想はやっぱり結婚してから妊娠して、出産っていう、あれが理想。でも、順番が逆でも今は幸せ。周りからみたらできちゃったとかって見られるけど。結婚しても子どもできないかもしれらんし」

【テーマ6:新たな発見】

「サブテーマ① 出産によって強くなった自分」

Data:「昔はちょっとしたことで泣くタイプやったんですけど、今は強くなったって主人とかには言われるんですけど、泣かなくなったかな…」

「サブテーマ② 出産によって改善した夫婦関係」

Data:「子どもができてからは調子どう？とかって話してくれるようになって、二人の会話が増えたかなあ。できるまではね、お互いあんまり話さんかったんですよ」

「サブテーマ③ 出産によって考えるようになった子どもの成長や親の老後、自分たちの老後」

Data:「20歳で産んだからお兄ちゃんが20歳になれば40歳になるし、ちょっと早めの老後を…じゃないけど、そんな感じかな。若いときにそんなに遊べらんかったから」

「親は年をとっていくし…子どもはその分手は離れるのかもしれないけど、男の子2人やし、これから、小学校に入るとか」

「サブテーマ④ 出産によって実感した夫や親のサポートの重要性」

Data:「うち旦那さんがすごい協力的なんですよ。なので、やっぱり旦那さんが協力的で一緒に育ててくれるから自分の負担もすごい少なくて、もう1人って思えるのかも」

「旦那のお義父さんもお義母さんも女の子が初めてなので、すごい喜んでくれて、いつも遊んでくれたりとかでかけるのに連れて行ってくれたりするので、有難いです」

【テーマ7:結婚・妊娠・出産を経験したことでのライフプランへの認識】

「サブテーマ① ライフプランの重要性」

Data:「ライフプランは絶対あった方がいいと思う。やっぱり計画は必要かな」「それはすごい素敵な事やなと思いますね。それがなくなかなか、今後の自分の成長というか、そういうものが伴っていかないというか」

「サブテーマ② ライフプランを持つことによる焦りやプレッシャー」

Data:「計画すると焦る場合とかもあるから、そんな時はどうなるのかなって自分の場合は思う」「ライフプランを持ったところで、その通りにするにもしんどいし、なるようにしかならんっていう考えが元々あって」

「サブテーマ③ ライフプランは修正しながら新しいライフプランを持つ」

Data:「ライフプランを持つことは、考えさせられるんでいいとは思んですけど、実際とは観点が違うんで」「一応夫婦では3人欲しいねっていう話をしてて、最終的に3人は欲しいんですけど、そのとき考えようとか、話しています」

「サブテーマ④ ライフプランには正しい知識も必要である」

Data:「10代で知るんやったら…。産めないときとかのリスク…例えば中絶するときのリスクもそうやし…仮に産むとしても、その時にお金がいる話とかも、知ってたほうが、心に刺さると思います。道徳的なこともやけど、リアルなことを言わんとというか」

V. 考察

1. 結婚前について語られたライフプランの背景と意味に関わる内容

まず、結婚前について対象者が語った内容からは、【女性の個人的考えや事情】【地域の背景や文化】【生い立ちや環境】【不確かな情報に惑わされる女性たち】の4つのテーマによってライフプランの背景にあるものが、また各テーマごとに意味を表すと考えられる2～4個のサブテーマが分析され、これらは対象者がライフプランを考えるとときに考慮する内容、あるいは影響している要因に当たる内容であると考えられた。テーマごとに考察する。

1) 女性の個人的考えや事情

このテーマを構成するサブテーマから【女性の個人的考えや事情】を説明する意味を中心に考察する。一つ目の意味は、心理的・物理的に独立の個人的価値空間を求める「個人化の進行」と一方で「夫は仕事、妻は家庭」という古典的な性別役割分業の意識がいまだに女性たちの心の中に根強く残っているということであった。柘植(1996)が、わが国においては結婚したら子どもを産むことは当然であり、従来家族制の下では跡継ぎや扶養のためであり、子どもがいて当たり前という家族観があり、いまも社会的圧力として存在すると述べているように、いくら個人化が進んだとしても、結婚はするもの、そして結婚したら、いままでの自由な生活は捨てて家庭生活中心にすがるものという考えが残っていることを示していると考えられる。また、二つ目の意味は、1人ででも子どもは産みたいと決意する母親や、不妊を乗り越えて母になる人へのインタビュー結果がまとめられて話題を呼んだ「子どもだけは生みたい症候群」(古沢, 1996)、女性とはにかく、「子どもだけは欲しい」傾向を示している(柏木, 1999b)などの指摘があるが、本研究の結果もそれを裏付けていると考えられる。三つ目の意味は、「できちゃった婚」による予想外の事情である。本研究において、「決断をせざるを得なかった予想外の妊娠」の事例が3例あり、このいわゆる「できちゃった婚」は、2002年に発表された人口動態統計特殊報告(厚労省, 2002)の中で26.3%であり、10代では81.7%、20～24歳でも58.3%と半数を超えてい

ることを報告していて、「できちゃった婚」は、社会一般の通常の妊娠形態になっていると言えるのではないだろうか。今後、少子社会においてこれは前提と考えると、その支援策を講じて、無事に出産を迎えることができるようにすることは重要な課題であると思われる。本研究対象者は、出来ちゃった婚であっても、家族の理解とサポートによって、家庭生活を維持し、一定の満足が得られる経験になっていることが示された。四つ目の意味は「二者択一性のある仕事と結婚」であった。対象者は、結婚するなら退職する、結婚しないなら仕事で生きるという二者択一の人生を考えており、キャリアを築くことに熱心ではない傾向も見て取れる。田和(2012)も、女性の出世意欲が低い背景について、まだ根強い伝統的な性別役割意識があることを指摘している。この仕事と結婚は、結婚後の中でも考察するが、女性のライフプランにとって重要な要素であることが明確になっている。沢山ら(2007)は、このような現象を、「いくら女性の社会進出が進んだとはいえ、男性のフルタイム雇用を柱とする日本型雇用慣行が企業に根を下ろしている現実の中で、女性の労働市場への進出は2通りの形をとって進み、一つは未婚で働くという状態の長期化、もう一つは結婚して一旦仕事を辞めた後、主婦の「パート」として復帰する形態」について説明している。

2) B地域の背景や文化

「結婚や妊娠について挨拶代わりに周囲の人に言われる」「跡取りという考えが残っている」という「B地域の背景や文化」の意味を表す2つのサブテーマは、高度経済成長を支えてきた家事育児と女性を結びつける強力なイデオロギーが、現在も、その時代を生きた世代の人たちにはしっかり浸透しており、そういう地域社会に生きる私たち自身をも縛っていることを表していると思われる。この背景には、明治政府が、民法で規定した「家」は、先祖代々ずっと維持されていかなければならない、「家あつての個人」という考え方を示し、現在も残っている戸籍制度の下で、法制度上では、家制度と決別したものの、「家」的な考え方は根強く残り続けている」と沢山ら(2007)が説明していることに他ならないであろう。

「結婚や出産年齢が若いというB地域の特性」に関しては、北村（2009）は農村部よりも都市部で晩婚化が進んでいるとし、さらに、核家族の割合が低い地域では結婚に対する家族からのプレッシャーや家族内での団結意識などが強いいため、結婚の地域格差があると報告しており、地域の特徴が女性のライフプランに影響していることが伺える。

3) 生き立ちや環境

片山（1996）は「母性」は妊娠した、あるいは出産した瞬間から芽生えるものものではなく、親となる前の時期からすでに、子どもをみて可愛いと感じたり、世話をし、保護しようとする傾向が存在すると述べていることから、テーマである「生き立ちや環境」が女性のライフプランにも影響していることが伺える。この意味を表すサブテーマとして上がった「友人や周囲からのプレッシャーや意見」に関して石野（2009）も結婚したい理由として「現在の両親の記憶」に加え、「友人との会話」から影響を受けているとし、結婚について周囲のよい面もよくない面も取り入れながら、将来について考えているようであるとしていることを指摘している。

4) 不確かな情報に惑わされている女性たち

多くの女性が得ている情報はインターネットや雑誌、テレビ、友人などからの不確かな情報のみであった。及川（2013）も出産育児にむけた準備に一番役立った情報源として「友人」「マタニティ雑誌・育児書」「兄弟姉妹」「看護師・助産師」を上げており、現状を表しているものと思われる。在本（2010）は未婚女性の生殖の知識とライフプランとの間には関連が認められたとしている。しかし、多くの女性が性教育の授業は覚えていないとのことなどから、今後、女性のニーズに合わせた本当に役立つ情報提供のあり方を検討していく必要があると考える。

2. 結婚・妊娠・出産を経験してみた後のライフプランの背景と意味に関わる内容

次に、結婚・妊娠・出産を経験してみた結果をもとに対象者が語った内容からは、【未知の体験

としての結婚・妊娠・出産は、予想通りにはいかない体験】【結婚生活の現実が甘くない】【家庭生活と仕事との両立の間での葛藤】【育児の重みと子どもへの思い】【自分が選んだ人生に折り合いをつける】【新たな発見】【結婚・妊娠・出産を経験したことでのライフプランへの認識】のライフプランの背景にあるものを表す7つのテーマと意味を表すサブテーマが分析された。これらは、現実に体験してみた結果の貴重なデータである。結婚前に語った内容と重なった内容としては、「個人化」と「性別役割分業意識」の狭間で、揺れ動く母親になった女性たちの気持ちの表明と経験してみても改めて実感する実生活の大変さであった。一方、子どもをもつことの充実感、葛藤や苦労、すべて満足ではないけれども、自分の人生、まずはこんなものかと折り合いをつける気持ち、成長していく自分に対する新たな発見などのカテゴリーが明らかになった。テーマごとに考察する。

1) 未知の体験としての結婚・妊娠・出産は、予想通りにはいかない体験

結婚・妊娠は、計画だけでなく、パートナーとの出会いや、丁度きりのいい時期のようなタイミングで生じるということはその通りかもしれないと感じるが、田和（2012）は、「将来、今考えたライフプランは変わるかもしれない。いや変わるであろう。今から人生のすべてを決められないからである。ただ、悔いのないライフプランニングは、各状況に対して行う「ベストな選択」の積み重ねである。自分がどうしたいかを考え、諸条件を判断し、あらゆる選択肢を考え、それぞれをシュミレーションしてベストだと思う選択をする。その練習を早い時期から繰り返しておくことが大切なのである」と述べている。また、核家族の中で育った女性たちは、結婚や出産に対する知識をほとんど持っていない。柏木（2001）は、「妊婦にはなったけど…」というタイトルで、「妊娠・出産を目前に控えたプレママの、これから自分の身に何が起こるのかを予め知っておきたい。できるだけ、自分と近い女性の体験を通して」と述べている。集団指導のような形を大事にする保健指導ではなく、妊娠・出産・育児を実際に経験した先輩から、現実的・実感のある意見を聞くような機

会が大切だと思われる。また、女性として結婚すれば当然のように、妊娠・出産に至ると思っていたが、不妊により子どもができず、葛藤した様子が伺えた。平成23年度における特定不妊治療助成事業における助成対象者延べ件数は112642件、実人員数68261、一人当たり平均助成件数1.65回（厚労省、2013）で、予想外の不妊による多くの女性の心身の負担、社会の負う経済的負担の増大が浮き彫りになっている。女性に対する早いうちからの不妊に関する正しい知識の啓蒙は今後もっと重要になってくると考えられる。

2) 結婚生活の現実が甘くない

多くの女性が夢見る結婚生活の現実には、制約の多い、思い通りにいかないものであることが垣間見えてくる。個人化が進んだ現在の社会で、こういう状態を想像できる人たちが結婚を選ばない状況を生み出している可能性もある。田和(2012)は、ワーキングマザーは時間のやりくりは大変だが、家庭生活や子育てがすべてではなく、精神的なバランスがとれていると述べている。「仕事」「家庭」「子育て」をバランスよく両立させるためのライフプランを立てて「人生設計」する必要があるのではないだろうか。国立社会保障・人口問題研究所(2007)で、女性の大多数(90.1%)は、いずれ結婚するつもりと回答し、この意識は継続していると説明されている。また田和(2012)も、女性が自己実現していくにはハードルが高い中で、女性がキャリアを重ねていくことに対して希望をもちにくい状況になっている。このような将来に対する先の見えない不安感の中で、「専業主婦」という選択が若い女性にとって魅力的に映ると述べている。安易に結婚を選ぶのではなく、自分の人生設計をきちんとした上で、さまざまな局面に向かっていくことが重要であろう。

3) 家庭生活と仕事の両立の困難性

4つのサブテーマから、【家庭生活と仕事の両立の困難性】というライフプランの背景にあるものの意味として自分自身の自己実現との間で揺れている女性像を汲み取ることができる。沢山ら(2007)は、女性が社会進出するようになったとはいっても、「夫は仕事、妻は家庭」という古典

的な性別役割分業が変容し、「夫は仕事、妻は仕事、家事」というさらに重複的な役割を担うようになり、夫婦の役割関係の相補性に破綻が生じ、なかなか、新たな相補的關係を生み出せないで、さまざまな問題が生じていると述べている。田和(2012)は、経済的に自立した女性になっておけば、結婚相手も社会的地位や収入重視で選ぶ必要はなくなるのである。素敵なパートナーに出会ったときに、二人合わせての世帯収入が高くなり家庭での発言権もある。もしパートナーと合わなくなったら離婚して新たなスタートもできると、ライフプランで女性の自立をすすめているが、それを支えられる社会の仕組みの実現は、喫緊の課題であると思われる。

4) 育児の重みと子どもへの思い

6つのサブテーマより【育児の重みと子どもへの思い】というライフプランの背景にあるものの意味を考察すると、育児を経験し、育児不安やストレスなど「育児の負担」を感じる一方で、育児の素晴らしさを再認識している女性の思いを感じることができる。牧野(1982)は育児不安とは無力感や疲労感あるいは育児意欲の低下などの生理的現象を伴って、ある期間持続している情緒の状態を指すとしており、多くの母親が育児不安を感じている。また、鈴木(2009)は、母親は試行錯誤する育児の中で、子供の成長を実感することから、自分自身の成長と母親であることを認識するようになるとしており、今回のインタビューでも同じような結果が見出された。また、柏木ら(2001)が、「現在の社会は、家事のほとんどが機械化・省力化されたにもかかわらず、育児負担が重くなっていると言われる。日本の母親は、他の国の母親に比べて子育てに対する肯定的な感情と否定的な感情の両方を持っているということがわかっている。つまり子育てに楽しみや生きがいを感じる一方でつらく苦勞が多いと感じておりそれは日本の伝統的な性別役割感で、家事と育児だけをするために家庭に閉じこもってしまった結果だと述べており、今回も同様の結果を見出した。

「ライフプランを変更してでも納得がいくまでしたい家庭保育」「女性の中で変化した子供の存在」「結婚は途中でやめられるが、育児は一生」

というサブテーマは、対象者が、経験を通して、育児の重要性や子どもの価値を実感していることを表している。上野ら(2010)は「子どもは3歳までは常時家庭において母親の手で育てないと、子どものその後の成長に悪影響を及ぼす」という“三歳児神話”は1960年代に広まった」としており、現代の女性の中にもいまだに残っていることも考えられる。しかし、原口ら(2005)は、母親たちは“子育てをしたい”と同時に“自分の生き方を大切にしたい”という葛藤が生じる傾向が強いとし、女性はいまだに残る三歳児神話や子育てがしたいという思いと、働きたいというアイデンティティの間で葛藤していることが示唆された。「女性の育児を支える友人や子育て広場」について、難波(2001)は育児サークル入会後84.2%の母親が「不安感・負担感が軽減した」としており、阿部(2007)は地域活動・学習活動参加のために外出する頻度が多いほど育児不安は弱くなる傾向があるとし、育児の共有は情報交換の場として有意義であるとしていることから現代の母親たちにとって子育て広場の重要性が高まっていることが伺える。さらに宮本ら(2000)は、友達の存在が母親の育児不安に影響しているとし、「何でも話し合える友達」がいない母親は育児不安が高いと報告していることから、医療者として妊娠期の母親学級や育児サークルなどでの仲間作りの場の提供することが重要であると考えられる。

5) 自分が選んだ人生に折り合いをつける

3つのサブテーマより、今まで自分が選んで経験してきた道は、100%満足ではないけれども、良かったのではないかという、「自分の人生に折り合いをつける」心境を表していると考えられた。小野田(2013)は育児生活が長くなっていくにつれて、育児生活に慣れていくことで気持ちに余裕が生まれ、気持ちの中で折り合いをつけていたり、実際にギャップを埋めるための行動に移していたりすることでギャップが小さくなっていくのではないかとしており、女性は結婚や出産後、様々なプロセスを経て、受容し、気持ちの折り合いをつけているのではないかと考える。さらに、高井(2011)は、大学生及びその他の男女1695名に対

するポジティブに生きる態度の調査で、「人生を前向きに生きている人の記述を通し、“どうにもならないことへの諦めや割り切り”、“あるいはあきらめるしか仕方がないから”といった諦めや割り切りによって、新たな内的世界が開け、今まで気づかなかったことに気づき、「生き辛さ」から「生きやすさ」へと転じている。ポジティブに生きていく態度には、「あきらめ、折り合い」の視点も重要で、不可能なこと、どうしようもないことに、心の整理を早くつけ、次なるステップに踏み出していこうとする力もポジティブに生きていくには大切な力になっている」と述べている。本対象者にも同じような心境が伺えた。

6) 新たな発見

親となることでどのような事が変わるのかという柏木他(2001)の調査で、「柔軟さ」「自己抑制」「視野の広がり」「運命・信仰・伝統の受容」「生きがい・存在感」「自己の強さ」を上げている。今回の結果も広い意味でその範疇に入るのはないかと思われる。

「出産によって実感した夫や親のサポートの重要性」について中山(2001)は妻がどのようなライフコースを選択するかには道連れである夫の意識や理解が影響を及ぼすといえりとし、女性の語りからも多くの女性が出産・育児、仕事復帰を機に夫や家族のサポートを必要とし、重要としていくことが見出された。

7) 結婚・妊娠・出産を経験したことでのライフプランへの認識

「ライフプランの重要性」について宮本(2007)は希望したライフコースを選択することができた母親が、希望したライフコースを歩んでいない母親より、過去の受容が高く、現在の充実感も高く、将来の希望も持てるという結果だったとし、希望したライフコースを歩めた場合の方が、過去の選択を納得し、充実した生活を送り、将来の見通しも立てやすいと推察されることからも、ライフプランも持つことが重要であるといえる。2007年にNPO法人FineとNPO法人日本不妊予防協会が合同で行ったインターネットによる不妊意識調査では、一般女性の生殖や不妊に対

する知識の低さが示されている。在本（2010）は生殖の知識とライフプランとの間には関連が認められたとし、女性が自己の性に対する意識や価値の認識を深め、正しい知識や適切な情報のもと、産む、産まないを自律的に選択できることが必要であるとしていることから、女性自身が生殖に関する正しい知識を持つことが必要であると考えられる。中山（2001）は結婚・出産を機にライフコースを変更する例が多いとしており、女性の語りからも結婚や出産は予想通りには行かないことも多く、結婚や出産を機にライフプランを修正・変更しているのではないかと考える。

VI. 結論

先行研究においてはライフプランに焦点を当てた研究は少なく、社会学者を中心に「子どもを産む意味」や「結婚観」のような形で行われてきた量的研究がほとんどであった。

今回の研究によって、女性自身が現実的に経験してきた結婚・妊娠・出産・育児を通して内面化された具体的で連続的なライフプランの背景にあるものと意味を表すプロセスが明らかになった。

1. 結婚前について語られたライフプランの背景と意味に関わる内容

結婚前について対象者が語った内容からは、【女性の個人的考えや事情】【地域の背景や文化】【生い立ちや環境】【不確かな情報に惑わされる女性たち】の結婚前のライフプランの背景にあるものを表す4つのテーマと各テーマごとに2～6個のテーマの具体的な事象や概念を説明するサブテーマが分析され、これらは対象者がライフプランを考えるときに考慮する内容、あるいは影響している要因に当たる内容であると考えられた。まず【女性の個人的考えや事情】については、主に社会学者の研究によって、日本の独特の文化の中で、個人化の進行が進んでも古い家族観に縛られる女性の考え方の傾向が指摘されていたが、今回の研究においてもそれは裏付けられ、女性たちが古い家族観に縛られていることが改めて浮き彫りになった。そのことが「二者択一性のある結婚」につながり、結婚を回避することにもなっていると思われる。「決断せざるを得なかった予想外の妊娠」は、

今では普通の形態になりつつある「できちゃった結婚」も家族や周囲の理解と支えによって、希望のあるものになり得ることを明らかにしている。【B地域の背景や文化】も同じく、地域に残っている、家事育児と女性を結びつける強力なイデオロギーが、現在も、その時代を生きた世代の人たちにはしっかり浸透しており、そういう地域社会に生きる私たち自身をも縛っていることを明確にした。今回の調査対象者の居住する地域が、農・漁村を中心に形成される地方都市であり「結婚や出産年齢が若い」という特性をもつことから、日本全国にあてはめられるかどうかは明言できないものの、情報均一化が浸透する社会の中でこの地域独特の地域特性とは言い切れないのではないかと考えられる。【生い立ちや環境】についてはライフプランとの関係で論じた論文は見当たらなかったが今回ライフプランに影響していることが伺える結果であった。【不確かな情報に惑わされている女性たち】は、情報が溢れる社会に生きていても、本当に必要な情報は得られていない不確かな社会環境の中で生活している女性の姿が明らかになった。個人化が進行するほど、女性が自分の生き方を最良の条件で選択できるように、女性のニーズに合わせた本当に役立つ情報提供のあり方を検討していく必要がある。

2. 結婚・妊娠・出産を経験してみた後のライフプランの背景と意味に関わる内容

結婚・妊娠・出産を経験してみた結果をもとに対象者が語った内容からは、【未知の体験としての結婚・妊娠・出産は、予想通りにはいかない体験】【結婚生活の現実には甘くない】【家庭生活と仕事との両立の間での葛藤】【育児の重みと子どもへの思い】【自分が選んだ人生に折り合いをつける】【新たな発見】【結婚・妊娠・出産を経験したことでのライフプランへの認識】の7つのテーマと各テーマごとに3～7個のテーマの具体的な事象や概念を説明するサブテーマが分析された。

【未知の体験としての結婚・妊娠・出産は、予想通りにはいかない体験】ではできちゃった結婚が普通の形態になっている中で、「結婚や妊娠・出産は、計画というよりタイミングである」というとらえ方、「経験を通して実感した妊娠期のしんどさ」は、分娩については、各施設で行われ

る指導によって理解が進んでいるものの、「妊娠」については置き去りにしている現場の状況を如実に表していると思われた。【現実には甘くない結婚生活】は、多くの女性が夢見る結婚生活の現実が、制約の多い、思い通りにいかないものであること実感させられる経験であることを示した。希望を持てる結婚生活を送るには、人生設計をきちんとして臨むことが重要になってくると思われる。【家庭生活と仕事の両立の間の困難性】は結婚前と同様に、結婚後も、日本の文化圧力の中で、自分自身の自己実現との間で揺れる女性像が浮き彫りになった。【育児の重みと子どもへの思い】については、育児を経験し、育児不安やストレスなど「育児の負担」を感じる一方で、育児の素晴らしさを再認識している女性の思いが現れていて、「ライフプランを変更してでも納得がいくまでしたい家庭保育」「女性の中で変化した子供の存在」「結婚は途中でやめられるが、育児は一生」などのサブテーマを通して、対象者が、経験を通して、育児の重要性や子どもの価値を実感していることを表している。「育児」は負担のつらさを超える価値を女性にもたらすのだという結果は、実際に育児の渦中にある女性たちが語った言葉として大きな意味をもつと思われ、今回の研究の貴重な結果であると思われる。医療者は、女性がこういう価値をより早く、実感できるように育児を楽しみと感じられる環境を提供していく責任があると思われる。【自分が選んだ人生に折り合いをつける】は、今まで自分が選んで経験してきた道は、100%満足ではないけれども、良かったのではないかという、「自分の人生に折り合いをつける」心境を表していると考えられた。女性は結婚や出産後、様々なプロセスを経て、自分が歩んだ過程を受容し、気持ちの折り合いをつけているのではないかと考える。そこには育児や家族生活の価値が作用していると同時に、一種のあきらめの心境によって、不可能なこと、どうしようもないことに、心の整理を早くつけ、次なるステップに踏み出していこうとする力になっている心境が窺えた。【新たな発見】では、「出産によって実感した夫や親のサポートの重要性」「出産によって改善した夫婦関係」「出産によって考えるようになった子どもの成長や親の老後、自分たちの老後」など、人間的

成熟を表すようなキーワードが見いだされた。結婚や妊娠・出産の体験がもたらす果実と言えるかもしれない。【結婚・妊娠・出産を経験したことでのライフプランへの認識】では、「ライフプランの重要性」とともに「ライフプランを持つことによる焦りやプレッシャー」「ライフプランは修正しながら新しいライフプランを持つ」「ライフプランには正しい知識も必要である」などのライフプランの本質を表すようなサブテーマが上がった。

参考文献

- 阿部範子 (2007) : 母親のライフスタイルおよび充実感と育児不安の関係, 日本赤十字秋田短期大学紀要, 12, pp.1-6.
- 在本祐子, 齋藤益子 (2010) : 未婚女性の生殖の知識とライフプランとの関連, 日本母子看護学会誌, 4 (2), pp.13-21.
- 阿藤誠 (1997) : 日本の超少子化現象と価値観変動仮説, 人口問題研究, 53 (1), pp.3-20.
- 原口由紀子, 松浦治代, 矢倉紀子, 佐々木くみ子, 笠置綱清 (2005) : 母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連, 小児保健研究, 64 (2), pp.265-271.
- 船橋恵子 (2006) : 育児のジェンダーポリティクス, 勁草書房, pp.1, 東京.
- 石野陽子, 清水寛之 (2009) : 青年期の結婚観と子育て観に関する予備的研究, 島根大学教育学部紀要, 教育科学・人文・社会科学・自然科学, 43, pp.87-95.
- 柏木恵子 (1999a) : 子どもを産むという価値, 教育心理学的研究, 47, pp.170-179
- 柏木恵子 (1999b) : 女性における子どもの価値—いまなぜ産むか—, 教育心理学研究, 47, pp.170-179.
- 柏木恵子・伊藤美奈子 (2001) : 女性のライフデザインの心理 (2) 自分らしい家族を設計する, pp.451.55-57, 大日本図書, 東京.
- 片山美由紀, 堀洋道, 山本真理子, 松井豊 (1996) : 心理尺度ファイル—人間と社会を測る—, pp.380-383, 垣内出版, 東京.
- 北村行伸 (2009) : 結婚の地域格差と結婚促進策, 日本経済研究, 60, pp.79-102.
- 国立社会保障・人口問題研究所編 (2007) : 日本の

- 人口減少社会を読み解く, 中央法規出版, 44, 東京.
 国立社会保障・人口問題研究所 (2012): 平成 22 年第 14 回出生動向基本調査報告資料第 30 号
<http://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/207750.pdf> (2014/12/20)
- 厚生労働省 (2012): 人口動態統計特殊報告,
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/04/> (2014/12/20)
- 厚生労働省 (2013): 不妊治療をめぐる現状報告: 平成 22 年の実績, <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r985200000314vv-att/2r985200000314yg.pdf> (2014/12/20)
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 (2014): 平成 26 年 我が国の人口動態-平成 24 年までの動向-, pp11, 31.
- 牧野カッコ (1982): 乳幼児をもつ母親の生活と「育児不安」, 家庭教育研究所紀要, 3, pp.34-56.
- 正岡寛司 (1994): 結婚の形と意味, 家族社会学研究, 6, pp.45-52.
- 宮田久枝 (2004): 高度生殖医療におけるクライアントの新たな心理・社会的困難 (2)-体外受精・胚移植を受ける女性クライアントの語り, 立命館社会論集, 40 (3), pp.57-76.
- 宮田久枝 (2006): 不妊治療における女性クライアントの子どもを持つ意味についての研究, 課題滋賀医科大学看護学ジャーナル, 3 (1), pp.7-12.
- 宮本純子 (2007): 乳幼児をもつ母親の育児不安についての研究 - ライフコース, 性役割態度, 時間的展望との関連から, 心理臨床学研究, 25 (3), pp.346-355.
- 宮本政子, 舟越和代, 中添和代, 時岡恵美, 森美代子, 渋谷幸彦 (2000): 乳幼児を持つ母親の育児不安の現状とその要因, 香川県立医療短期大学紀要, 2, pp.115-121.
- 内閣府 (2013): 少子化社会対策白書, 平成 27 年版, P.2, 東京.
- 中山和美, 星山佳治 (2001): 出産経験者における出産に対する意識: ライフコースの視点から, 母性衛生, 42 (1), pp.222-229.
- 難波茂美, 松本雅子 (2001): 地域における母子クラブの有効性について, 保健婦雑誌, 57 (13), pp.1076-1079.
- NHK 取材班編著 (2012): 産みたいのに産めない〜卵子老化の衝撃〜, pp.8 ~ 22, 文芸春秋社, 東京.
- NPO 法人日本不妊予防協会編著 (2008): 不妊予防のためのマニュアル, pp.2-8, 母子保健事業団, 東京.
- 及川裕子, 宮田久枝, 新道由記子 (2013): 初産婦における出産・育児の準備の実態, 園田学園女子大学論文集, 47, pp.95-104.
- 小野田奈穂 (2013): 育児期女性の「個人としての自分」と育児ストレスとの関連, 理想と現実のギャップからの検討, 家族心理学研究, 27 (2), pp.123-136.
- 斎藤嘉孝 (2012): 定位家族の親夫婦の関係性が若者の結婚への態度に与える影響 - 大学生を対象とした量的調査の結果より, 法政大学キャリアデザイン学部紀要, pp.369-379.
- 沢山美果子, 井上真珠, 立山徳子, 赤川学, 岩本痛弥 (2007): 家族はどこへいく, pp.66-75.85, 青弓社, 東京.
- Spradley, J.P. (1979): The ethnographic interview, Holt, Rinehart and Winston, pp.107-119.
- Spradley, J.P. 監訳田中美恵子 麻原きよみ (2010): 参加観察法入門, 医学書院, iv, pp.111-128.
- 鈴木由紀乃, 小林康江 (2009): 産後 4 か月の母親が母親としての自信を得るプロセス, 日本助産学会誌, 23 (2), pp. 251-260.
- 高井範子 (2011): ポジティブな生き方態度の形成要因に関する検討: 青年期から高齢期を対象として, 太成学院大学紀要, 13, pp.79-90.
- 栢植あずみ (1996): ジェンダーの視点から地域・生活を考える・7 なぜ子どもがほしいのか: 不妊治療とジェンダー, 保健婦雑誌, 52 (7), pp.578-581.
- 田和真希 (2012): 女性のためのライフプランニング, pp.3,8,10,20-21.63, 大学教育出版, 東京.
- 上野恵子他 (2010): 文献の動向から見た育児不安の時代的変遷, 西南女学院大学紀要, 14, pp.185-196.
- 山崎圭子 (2009): 妊孕力の低下年齢と認識と妊娠決定尺度との関連, 日本母子看護学会誌, 第 3 巻, 第 2 号, pp.23-31.
- 吉沢由美子 (1996): 子どもだけは生みたい症候群, 芸神出版社, 東京.

インタビューガイド

今回のインタビューはお一人様40分程度を目安としています。もう少し詳しくお話を聞かせていただきたいときは再度連絡をさせていただいてもよろしいですか？

以前お話しさせていただきましたように、インタビュー中、ICレコーダーの録音とメモをとらせていただきますがよろしいでしょうか？

ライフプランについてお話を聞かせていただきたいと思っています。

つきましては、今回質問の中でライフプランという言葉が何度か出てくると思いますが、ライフプランとは「結婚や出産に関するご自身の計画」という意味で使っていますのでよろしくお願ひします。

では、これから質問させていただきますのであなたの考えをご自由にお話してください。

まず、いくつかの質問について答えられる範囲で構いませんので教えてください。

年齢	結婚年齢	今回の児は第何子か	出産年齢
歳	歳	第 子	第1子： 第2子以降：

1. あなたの人生において結婚することや妊娠し赤ちゃんを産むことはどのような意味を持つのでしょうか？（あなたにとって結婚・出産とはどのようなものですか？）

(サブクエスチョン)

①〇〇さんが結婚前に持っていたライフプランについて何かありましたらお話ください。

例) 結婚の時期や子どもの人数、仕事の継続…

②ライフプランを考えたときや結婚・子どもを妊娠して出産するとなったときに悩んだりしたことがあればお話ください。

例) いつ結婚しようかな、仕事はどうしようかな、早く子供を産みたい…

2. あなたが結婚・妊娠・出産をするにあたり、考慮したことまたはその決断に影響したと思われることについてお話してください。

ご自分の中で、結婚や妊娠、出産について意識するようになったことについて自由にお話してください。例えば意識するようになった時期とか、理由

とか、中身とか。なんでも…。

(サブクエスチョン)

①親戚や友人など、あなたの周りの方で、結婚や妊娠に対する考えについて影響を受けたと思われる方はどなたかいらっしゃいますか？その方からどんな影響を受けたのでしょうか？

②結婚や妊娠、出産について、自分がこうしたいと思ったことと現実はどうだったのかについてお話してください。例えば、時期のずれとか、なぜそうなったかとか、結果的にはどう思っているかとか…。

③結婚や妊娠、出産について事前に知っていればよかったなあとか教えておいてほしかったなあとと思われることがあればお話ください。

例) 不妊症や妊娠時のリスク、高齢出産、少子化について意識したことはありますか？

3. 今回の面接の全体内容を通してもう少し話したいことや追加したいこと、感じていることなどあったら何でもお話してください。